

項目の区別は必ずしも画然としてはいないが、読みやすくするための分類と思われる。「あとがき」を読むと過去四十数年にわたって、四百篇の論文を書いたというから、明日にでももう二冊の「新覚書」が刊行可能の計算となる。

内容のトピックスはきわめて広範多岐にわたっている。「書籍」としては有名書のエピソード、惜しくも散逸してしまつた無名書。「人物」はもちろん医師が大部分だが、日本人、外国人、有名人、無名人、さらに医師の名簿として門人録、門籍録、門下生、人名録等が幅広く引用されている。「病氣」としては地方病、ツツガムシ病、くる病、梅毒、疫病、コレラ、陽チフス、赤痢、精神病、種痘など。「病院」としては施薬院、狂疾院。「薬」としては目薬、毒消し、熊の胆、ほねつぎの薬、採薬など。「碑」としては石碑、墓碑、筆塚など。さらに医学教育、医療事故、法律、診断書、免許証、法度書、戊辰戦争ほか多数である。

これらのテーマは我々の周囲にあつても、つい見過ごされやすいものである。それを著者は足をもつてオリジナルの場所を訪れ、眼とペンをもつて確実に捕らえ「覚書」とする。必要に応じて図書館や公文書館へ通うのもやぶさかでない。しかも日本国内だけでなく国外出張も敢えて辞さない。私はかつて著者から、ほんの數行の史実を調査するためだけにロンドンまでいつてきたと聞いてただただ驚きいつたことがある。公私ともに多忙を極める彼がどうして可能かと疑つた。

本書は新潟県だけのものに特定しているが、決して一地方

のものでなく、全国に共通する話題を提供している。さらにひき続いて、第二、第三の「覚書」を刊行されることを希望する。

(大滝 紀雄)

〔新潟雪書房・新潟市浦山三一一二八、電話〇二五一一六七—九二〇五、A5判三三〇頁、二五〇〇円〕

### 長谷川正康著『齒の風俗誌』

本書は「齒の風俗史」ではなく、「齒の風俗誌」である。手許にある辞書をみると史は文書または歴史、誌は書き残す記録、風俗はその社会の衣食住などのならわし、風習とある。

本書の内容をみると、第一話 齒にまつわる民俗風習、第二話 わが国のお齒黒文化とあるが、第三話は入れ齒の史話、第四話 日本における齒磨きの歴史、第五話 齒吹如来像の謎、第六話 齒の字の話、第七話 近代歯科医学の先覚者からなっている。

齒に宝石を飾るマヤ族の風習、生きた齒を抜く風習(欠齒)、生齒を削つた風俗や日本のお齒黒文化で、お齒黒の起源、男子のお齒黒、江戸の女子お齒黒の風俗から日本文学の古典にみられるお齒黒の話など齒にまつわる古今東西の歴史秘話から書き起こし、次いで、延宝三年(一六七五)に没した柳生飛騨守宗冬(宗冬)の墓から発見された木床上下顎総入れ齒が端緒となり、当時瀧澤馬琴、杉田玄白、本居宣長が実際に使用して

いた史実を日記などから明らかにし、「総入れ歯のルーツは日本」と題して記載している。その他、粹な江戸っ子の歯磨き、塩から磨き砂へ、「忠臣蔵」歯磨塩の騒動などからすさまじいお江戸の歯磨粉商戦、そして西洋式歯磨きの伝来などにふれている。また、著者のライフワークである「歯吹如来像の謎」など著者の優れた史観によるわかりやすい解説は類書にみることのできない名著であり、良書であるといえる。

著者は現在東京歯科大学名誉教授でありながらも今も火曜日は付属病院で、月・水・金は自宅で「子息とともに歯科診療に従事するかたわら、日本歯科医史学会監事、The American Academy of the History of Dentistry 会員のほか国際歯科学会（ICD）国際理事で、国際人であるとともに、歯科医史学の重鎮である。著書には「むしばのたはごと上下」（書林）、「歯は生命・噛む」（求龍堂）、「頭のよくなる歯の噛み合せ」（新星出版）、「歯科の歴史、おもしろ読本」（クインテッセンス）などの名著がある。本書は歯に関する東西の風俗をもとに古き歴史の認識を基盤として「歯の字の話」、そして「近代歯科医学の先覚者」で結び、近代歯科医学史の真髄に触れている。本書は今まで知らなかった歯の風俗誌を見、それから歯の風俗史を知る最高の喜びと楽しみを味わせてくれる数少ない良書であり、加えてこれまで気づかれることのなかった温故知新から新しい歯科医学の方向を示しうる名著といえる。

「私は歴史家でもない。風俗史や民俗史を専攻したものである。まして世間という考証家でもない。しかし、自分の職

業を通じて歯というものが昔から人とのような関わりあいがあるのか、現在に至るまでの軌跡を述べ、皆様に歯に対する関心を持っていただきたいと願って本書を書いた」と著者はいう。この「あとがき」に乾杯！

そして良薬は口に苦しといわれるように、得てしてこの種の良書は面白くないのが定説である。著者は「寝転んで、あるいは電車の中で、また、待ち合わせの合間に気軽に読みただければ幸いと思う」と結んでいるが、本書はまさに、そのような本で、一般の人々にもおすすみたい良書である。

（谷津 三雄）

〔時空出版・東京都文京区小石川四一八一三、電話〇三―三八一―五三三三、一九九三年一月三〇日発行、B6判、全一九五ページ、定価一六〇〇円〕

「京都府立『癲狂院』の設立とその経緯」（三十九巻四号）の著者から訂正希望の申し入れがあり、検討の結果これを掲載することとした。

編集委員会

## 〈訂正〉

「依刹毘埵児」は「鬱憂」ではなく今日という心気症と考えられる。また「自尊狂、酒癖」は当時の英国流診断法にも、